『重訂解体新書』所引の中国書籍の研究
――『医学原始』と『物理小識』について

陶　恵　寧

日本医史学雑誌第四十八巻第二号　平成十三年九月八日受付
平成十四年六月二十日発行　平成十三年十二月二十二日受理

〔要旨〕大槻玄沢の『重訂解体新書』には『医学原始』と『物理小識』からの引用が認められる。引用の仕方は原文そのままの引用、難解な用語に対する注釈としての引用、原文の誤りに対する訂正とがある。以上を精査した結果、西洋医学を日本に導入した初期段階においては、オランダ医学書の翻訳に漢文の解釈と説明を利用して理解していたことが判明した。即ち、『医学原始』と『物理小識』が『重訂解体新書』の完成及び西洋医学の輸入に重要な役割を果たしたことが、本研究で初めて明らかにされた。

キーワード――『重訂解体新書』、『医学原始』、『物理小識』、大槻玄沢

『重訂解体新書』（十三巻）は、杉田玄白が翻訳した『解体新書』（一七七四）を大槻玄沢（一七五七～一八二七）が重訂して、一八二六年に刊行した西洋医学の解剖学訳書であり、日本の医学史上、特に身体観の変遷を知る上で重要な医学典籍である。

大槻玄沢は『重訂解体新書』（以下、『重訂』と略す）中で杉田玄白らが訳した不完全な西洋医学の訳語を改め、さらに当時の基本的な解剖学訳語の混乱も整理した。[1] その後、日本医学に蘭方の導入が進み、西洋医学が徐々に発達してゆくこととなるのである。

本研究においては、大槻玄沢が『解体新書』を重訂するために、意外なほど数多くの漢籍（特に中国の医書）を引用したことに注目して、『重訂』に引用された漢籍の中で、『医学原始』と『物理小識』の内容を分析した。その際に大槻玄沢が何故これらの書籍を選んだのか、大槻玄沢の漢籍に対する選択方針と引用方式を検討した上で、『重訂』の完成へ与えた影響及び中国医学史における『医学原始』と『物理小識』の位置づけなどを考察することとした。

一、『重訂解体新書』に引用された漢籍

大槻玄沢が『解体新書』を重訂するにあたり、「我邦及漢土。従前諸説。間有下与二西説一暗合スル者上。乃輯録シテ為二一巻一ト。以供ス二参攷一ニ。（わが国と中国における各学説の中で、もとより西洋医学と合っているものを集め、一巻にまとめ参考に供す）[2]」と述べて、それを『重訂』の「附録篇」とした。その理由を「若シ能ク取二舎スレハ之一。則於テ三発一揮スルニ二真一理ヲ一未ス三必シモ無クンハアラ二小補一也。（もしこれらをよく取捨できれば、真理の発揮には役立つことが少なくないはずだからだ）[3]」と述べている。

『重訂』の附録篇には、西洋医学の専門用語の解釈を補完するために、参考として漢籍を多く引用した形跡が認められる。今回の調査によって、引用された中国書籍の種類は二十以上にのぼることが明らかになった。

『重訂』の附録篇に引用された主な漢籍は医書では『内経』（『黄帝内経』、即ち『素問』と『霊枢』）、『甲乙経』（『針灸甲乙経』皇甫謐）、『本草衍義』（寇宗奭）、『素問玄機原病式』（劉完素）、『万病回春』（龔廷賢）、『本草綱目』（李時珍）、『証治準縄』（王肯堂）、『壽世保元』（龔廷賢）、『医学原始』（王宏翰）、『本草備要』（汪昂）、『釈骨』（沈彤）、『世医得効方』（危亦林）

がある。思想書では『荘子』、『孟子』、『淮南子』がある。歴史書では『後漢書』、『通鑑』漢紀、『貞観政要』がある。その他に、『物理小識』、『釈氏要覧』、『黄庭経』、『格知鏡原』、『蠡海集』、『古今韻会挙要』、『釈名』などからの引用も散見している。

それら引用漢籍の中で引用頻度が高かった『医学原始』と『物理小識』を取り上げて検討することとした。

二、『医学原始』と『物理小識』について

二―1　『医学原始』

『医学原始』は、王宏翰が一六八八年に著した医学書である。全四巻、計六十七篇からなる。本書は中国医学の典籍と宋元時代の医家の学説をまとめ、人体の臓腑気血理論を論述したものであるが、西洋医学と性理学[4]を多く取り入れて、人体の生理現象と病理変化の説明を企図した書物である。

著者の王宏翰（?～一七〇〇）は清代の医家である。字は恵源で、号は浩然子といった。江蘇華亭（現在の上海市松江区）の出身で、後に呉県（現在の江蘇省蘇州市）に移っている。王宏翰は儒学、理学、天文学に詳しいキリスト教徒であり、よく西洋人の耶蘇会士と共に西洋医学も含めた洋学の研究を行った。そのため、中国近代医学史においては、西洋医学を受け入れた初期の代表的人物として知られている。[5]

王宏翰は『医学原始』のほかに、また、『古今医史』（八巻）、『四診脈鑒大全』（九巻）、『幼科機要』、『古今医籍考』（十二巻）、『傷寒纂読』（九巻）、『病機洞垣』、『本草性能綱目』（四十巻）、『刊補明医指掌』（十巻）、『急救良方』（一巻）、『方薬統例』（三十巻）、『女科機要』（九巻）、『怪症良方』（二巻）、『寿世良方』（三巻）、『天地考』（九巻）、『乾坤格鏡』（十八巻）などの医書を著したが、殆ど現存していない。[6]

二―2　『物理小識』

『物理小識』は、方以智が約二十年間にわたって完成した百科全書の雛形である。本書は一六六四年、息子の中通によって刊行されたもので、全十二巻からなる。書中に動物・植物・鉱物・物理・化学・医薬に関する先人の諸学説や古書の記載が数多く引用されている。巻三の「人身類」中に西洋医学の引用が見られる。

著者の方以智（一六一一～一六七一）は明代の学者である。字は密之で、号は曼公、また、竜眠愚者・無可ともいった。安徽省桐城県の出身であるが、波瀾万丈の人生を送ったといわれるように、北京・江西・福建・広東・広西など各地を放浪している。方以智の学問分野は幅広く、文学・哲学・美術・天文・医学などの領域に及んでいる。中でも哲学に優れ、中国明代の哲学者として高名であり、高く評価されている。[7]

方以智は湯若望、畢方済らの西洋人の耶蘇会士との交流があり、彼らから西洋医学を含めた西洋の学問を得ていた。『物理小識』には西洋医学の解剖学、神経学、生理学の知識を取り入れている。このように方以智は早期に西洋医学を受け入れたことで、中西医学匯通（中国医学と西洋医学を結びつけること）派とその思想の啓蒙者と言われている。[8]

方以智が著した医学の専門書は『医学会通』（附『明堂図説』）、『内経経絡』の手書き写本があり、医学内容に言及している一般の著書としては『物理小識』のほかに『通雅』が現存している。

三、『医学原始』と『物理小識』に引用された耶蘇会士の著書

明末清初の十七世紀に、西洋人の耶蘇会士は、中国知識人の助力を得て漢文で書いた書籍によって、キリスト教の布教を行った。それによってヨーロッパの科学と学問を中国へ大量に紹介して、中国の洋学の受容に大きな影響を与えた。西洋医学もその中に含まれていた。

しかしながら、当時の耶蘇会士はヨーロッパの封建貴族の旧教を代表していたので、中国に紹介した洋学は、そのと

きすでに台頭していた近代ヨーロッパ科学ではなく、中世期の神学と哲学であった。[9] それに彼らの漢語のレベルと医学用語の翻訳の問題があり、さらにこれらの書籍が主に宮廷或いは上流社会に限定して流通したという問題もあった。その結果、広く流布された西洋医学書、或いは西洋医学に関する文献はきわめて少なかった。

『医学原始』と『物理小識』に主に引用されていた『性学觕述』、『空際格致』、『泰西水法』、『主制群徴』などの文献も左記のように、全て耶蘇会士が漢文で編述したもの、或いは彼らが書いたものを漢文に訳したものである。[10]

『泰西水法』（一六一二年）は、イタリア人熊三拔（P. Sabbathino de Ursis　サバチン・ド・ウルシス、字は有綱、一五七五～一六二〇）の口述を徐光啓らが訳した水力機械、農田水利の専門書であるが、人体四肢の運動原理、体液の生理と病理、消化生理の知識、温泉療法及び人間と自然の関連などについての記述がある。

『主制群徴』（一六二九年）は、ドイツ人湯若望（P. Jean Adam Schall von Bell　アダム・シャール、字は道未、一五九一～一六六六）の著書で、全二巻からなる。書中に人体構造と生理機能などの医学知識に言及している。

『空際格致』（一六三三年）は、イタリア人高一志（Alphonsus Vagnoni　原名王豊粛、一五六六～一六四〇）が著した自然哲学の専門書である。そこで述べている学説は近世以前にヨーロッパで流布されたもので、古代ギリシャ、ローマの四元素説と生理解剖の知識に言及している。

『性学觕述』（一六四六年）は、イタリア人艾儒略（Jules Aleni　ジュリオ・アレニ、字は思及、一五八二～一六四九）が著して、陽瑪諾、黎寧石、伏若望が校訂した宗教・神学・性学[11]の専門書であり、全八巻からなる。その中に生理学、病理学についての記述がある。

四、『重訂』における漢籍の選択方針と引用方式

『重訂』に引用された頻度が一番高かった漢籍が『医学原始』と『物理小識』であったことはすでに明らかにした。[12]、[13]

『医学原始』からの引用は、第二巻の「四元行論」、「紅液黄液」、「黒液」、「白液」、「脈経之血由心煉」、「動覚至細之力徳」、「知覚外官総論」、「目之視官」、「耳之聴（聞）官」、「鼻之嗅官」、「口之味（啖）官」、「身之触官」、「総知司（職）」、「渋記司（職）」、「嘘吸論」で、計十五篇からの引用があった。

『物理小識』からの引用は巻三「人身類」の血液循環と骨格筋肉の構造である。

『重訂』への引用箇所と引用文から、大槻玄沢がそれらの漢籍を選択した意図がうかがえる。ここでは漢籍の選択方針、引用の仕方を明らかにするためにそれら引用文を検討した。

四-1　選択方針

『医学原始』からの引用文で大槻玄沢の選択方針を次の二点にまとめられる。

①　西洋医学重視

大槻玄沢は「抑モ東西彼我所ノ建ル之医道。摸定ト与ニ実測一。霄壤カニ懸異ナリ（東洋医学と西洋医学の医道が建つ所は摸定と実測にわかれており、これは天と地のような違いがある）」[14]と述べる。この見解は彼が西洋医学を信頼して西洋医学に斜していたことを示している。彼が『解体新書』の校訂に漢籍から引用した内容は、中国医学と、翻訳された西洋医学との両面に及んでいるが、以下に示すように大半が西洋医学に関するものであった。

例えば、脳と神経について、「凡方王二氏所ハ説ク。則蓋伝テ二西説ヲ一而所レ述（方以智、王宏翰の理論は西洋医学の学説に基づいて述べたものである）」[15]、また、『医学原始』の「耳之聞官論」について「按ニ是実測ノ正説（これは実証した正論である）」[16]と記述していることから、これらの書物を引用するにあたって、大槻玄沢が西洋医学の記述は実測に基づくものを重視し、高く評価していたことは十分理解できるであろう。

②　東洋医学への評価

『重訂』から大槻玄沢の東洋医学に対する態度を知ることができる。

東洋医学について、杉田玄白は『解体新書』に「取漢土古今之医籍。而読之。回復鑽研。茲有年矣。尋究其療法論説。多是牽強附会。疎鹵尤甚。欲晰之愈暗。欲匡之愈謬。芒芒乎猶邯鄲之学歩者矣。嗚乎。和蘭之書。所難解者。不過十之七。而漢説所可取者。不過十之一耳。（古今の東洋医学の医書を読んで、何年間もかけて研鑽したが、その療法学説の殆どは牽強付会のものであることがわかった。明らかにしたいと思えばいよいよ暗くなり、訂正したいと思えばさらに誤りが生じる。茫然として、邯鄲のあゆみのようである。オランダの書籍には理解しにくいものは七割に過ぎないが、東洋医学で実用価値があるものは一割しかない）[17]」という見解を示した。

それに対して、大槻玄沢は漢籍に親しんでいる日本人に西洋医学を理解させるために、西洋医学に言及している中国医書を積極的に引用したが、引用漢籍の中で西洋医学の観点から見て合理的でない東洋医学説は率直に否定している。例えば、尿に関しては、「漢説曰腎蔵精。或小腸下口。泌別清濁入中膀胱者。皆妄誕也。（東洋医学では、腎が精を蔵す。或いは小腸の下口が、清濁を分別して膀胱に出すという。すべて妄言である）[18]」と東洋医学説を否定した。内容によって取捨選択した例である。

『医学原始』の「耳為聞之具。腎気通于耳者。（耳は聴覚の器官で、腎臓の気は耳に通じる）[19]」という東洋医学の理論に対して、大槻玄沢は「王氏未脱旧染也。耳何関於腎哉。（王氏はまだ旧説から出ていない、実際には、耳と腎臓には何の関係もない）[20]」と批判している。

さらに、西洋医学について『医学原始』が説明している部分でも、内容が東西折衷され、不十分な部分を大槻玄沢は何度も「可惜也（惜しむべし）」と述べている。例えば、心臓については「古今諸説。半上落下。此皆不就実之弊也。唯輓近王氏之書。則記伝聞之訳説。有脈経之血。由心煉之論。可取者。惜哉未尽其詳也。（古今の理論は皆めちゃくちゃで、事実と全く合わない欠点が存在するが、近代の王氏の医書は、当時伝聞した伝来の学

説を記した。経脈の血液が心臓をまわっていることは理解できるが、詳細を記録していないのは、惜しいことである)[21]」、鼻については「此亦伝テ西説一。而所レ記也。然レドモ語テ而不レ詳。可レ惜也。(これも西洋から伝われた知識を記述したものであるが、説明が詳しくないのは、惜しいことだ)[22]」と指摘している。

四-2　引用方式

それでは、大槻玄沢が漢籍を参照する際には、どこに主眼を置いて、引用しているだろうか。『物理小識』を例に彼の引用の仕方を見てみよう。

①　原文を肯定して採録

『物理小識』において、大槻玄沢は事実に基づいていると判断した西洋医学の記事はそのまま採録している。

例えば、『重訂』第九篇に脳神経・脊髄神経に関しては、「第脳ハ距ルコト身ヲ遠ク。不レ及三引テ筋ヲ以テ達スルニ百肢一ニ。復タ得下頸膂髄連リレ脳ニ為二一因一徧ク及フコトヲ上焉。(脳は身体より遠くにあるため、筋(神経)を引きからだのすみずみまで到達させることができず、頸膂髄によって脳とつながり、一つとなることで全身にゆきわたらせている)」、「独一偶。踰ヘテレ頸ヲ至二胸下一ニ。垂二胃口之前一ニ。余ハ悉在二頂内一ニ。(ただ一対が頸を越えて胸下に至る、胃口の前に降りる、その他はすべて頂内にある)」、「導二気ヲ于五官一ニ。或ハ令シテ之動カ一。或ハ令シテレ之覚セ一。(五官に気を導いて、或いは動かさせる、或いは感じさせる)」、「又従二膂髄一出レ筋三十偶。各有二細脈一。旁分無二膚トシテ不一ルコトレ及。其與レ膚接処。稍変。似リ下膚始テ縁。以引テレ気ヲ入ルニ上レ膚ニ。充二満周身一ニ。無レ弗ルコトレ達セ矣。(また、膂髄から筋が三十対出ており、おのおの別々に分かれている細脈がある。及ばない皮膚はなく、皮膚と接するところが少々変わって皮膚の縁に似ている。これによって気は導かれて皮膚に入り込み、全身を満たして至らないところはない)」。「筋之体。瓤ニシ二其裏ヲ一。皮ニス二其表ヲ一。類二于脳一ニ。以テ為下脳ト與二周身一。連結之要約上。(筋の本体は中には中味があり、表には皮があって、脳に類している。筋によって脳と全身とつながり、連結のポイントとなっている)[23]」などの記述がある。左記はすべて『物理小識』において『主制群徴』か

ら引用されたものである。

② 難解な部分を注釈するための引用

西洋医学の知識は中国医学とまったく異なるため、日本人にとって難解な箇所がある。それを分かりやすくするために、大槻玄沢は簡潔な言葉に言いかえ、或いは他書の見解や西洋医学の知識を引用して注釈している。

例えば、方以智の「脳ハ散ス二動覚之気ヲ一厥用在レ筋。（脳の運動機能が筋にある）」の記載に対して、大槻玄沢は「按ニ謂レ筋ト者ハ。即神経ナリ也。（筋は神経であろう）」[24]と解釈して、ここの「筋」は神経であることをはっきり指摘している。ちなみに、神経の言葉は杉田玄白が『解体新書』を翻訳するとき、神気の神と経脈の経とを合わせて創った言葉である。[25]

『重訂』に「脳之皮分二内外層ヲ一。内柔ニ而シテ外堅。（頭の皮は堅い外層と柔らかい内層に分かれている）」に対して、大槻玄沢が王宏翰の著作から「脳之髄。包ニ以ス二層之皮ヲ一。（脳の髄は二層の皮で包まれている）」を引用して、これが厚と薄の二枚の脳膜であると明言した。[26]引用文の「肇二始ス諸筋一。（諸筋からはじまる）」に対しても、大槻玄沢は再び、「諸筋」を「神経諸道也」と記し、各神経であることを強調した。[27]

西洋医学の「脊髄」に対して、「按ニ古ニ所謂諸髄。皆属二於脳一。故ニ上自レ脳。下至二尾骶一ニ。皆精髄升降之ノ道路ナリ也。与レ此暗ニ合ス。（古く言われていた諸髄はすべて脳と繋がる。だから、上は脳から、下は尾骶に至るまで、すべて精髄の昇り降りする道である。これは西洋医学の見解に合っている）」と見ている。方以智の「従二脊髄一出スコトレ筋三十偶。（脊髄から出ている神経は三十対ある）」の脊髄神経に関する記載に対しても、これを「蓋伝二西説ヲ一。而所ナリレ録スル也。（西洋から伝われた知識によって記述したものである）」[28]と記している。

③ 誤りを訂正

引用した漢籍の誤っている箇所を、大槻玄沢は西洋医学の知識をもって率直に訂正している例もある。

例えば、『物理小識』に『主制群徴』から引用した「筋自レ脳出ル者六偶（脳から出た神経は六対ある）」という記述に対

して、大槻玄沢は「六」は「十」の誤りで、正しくは「十対」であると訂正している。[29] ちなみに、脳神経は十対というのが当時の西洋医学の通説であった。

大槻玄沢は王宏翰の『医学原始』を重視しているが、方以智の『物理小識』の正しい論述で、『医学原始』の誤りを訂正し、『重訂』に記したところもある。例えば、王宏翰の「髓之後。生二脊骨之髓一ヲ於背一ニ。又於二脊骨一。生二二十四双之筋一ヲ。（背骨・髓から二十四対の神経が出る）」の論述に対して、大槻玄沢はこれが間違った認識であり、方以智の見解が正しいと明記して、王宏翰の「二十四双之筋」の論述を否定した。[30]

五、考　察

ここで、きわめて早い時期に西洋医学について記述された『医学原始』と『物理小識』が中国医学史においてどのように位置づけられているか、『重訂解体新書』の完成（翻訳）にどんな影響を与えたかについて考察する。

五―1　中国医学史における『医学原始』と『物理小識』の位置づけ

十六、七世紀の中国は社会の激動の時代であり、公刊された西洋関係の書物も多くなかった。そのような状況下で、耶蘇会士によって西洋医学が中国に導入されたが、この時の西洋医学は中国医学にあまり大きな影響を与えなかった。中国医学のさらなる発展を求めて、中国の医家は中国医学と西洋医学を統合する道を探り始めていた。中西医学匯通の思想の誕生であり、流派もその時から徐々に生まれた。王宏翰と方以智がその時期の西洋医学を受容する代表的人物であり、中国医学史、特に中西医学匯通史に名前と業績を残している。[31]

①『医学原始』

王宏翰は、西洋医学とはじめて出会い、「力斥旧説之妄誕、尤疾蘇医之庸陋（旧説の妄言を責め、医者の庸愚を憎む）」[32]ことによって、ここに中西医学匯通の発想が生まれた。それを大部の書をもって言及したのが『医学原始』である。

『医学原始』の書中には当時の洋書から一部の西洋医学の内容が原文をそのまま採録した部分と、古代中国医学の知識を取り入れた部分とが混在している。

前者に属する部分は、感覚運動論・記憶・呼吸などであり、それには西洋医学の知識が記されているが、それらすべてが当時の中国において新しい知識であった。

一方、後者に属する部分は、骨格と筋肉などの解剖学の記述である。中国医学の古典『素問』、『霊枢』、『甲乙経』、『難経』の理論を踏襲したことがはっきり看取される。王宏翰の中西匯通は中国医学と西洋医学の理論を混在させただけのことであり、西洋医学と中国医学の違いを深く細かく分析することはなかった。刊行後の『医学原始』が重視されなかったのはこのことが一因であろう。

原本の残存状況は、この本がどのように評価されたのかを知る上で貴重な証拠である。中国で、一九九一年に行った中医関係書籍の全国調査によると、『医学原始』は現在、一六九一年に刊行した四巻本のみで、中華医学会上海分会図書館に一部が所蔵されているにすぎないことがわかった。[33]『医学原始』は一九八九年、「明清中医珍善孤本精選」のシリーズの一冊として、上海科学技術出版社によって影印本が出版されたが、[34]『医学原始』については、「清の医家王宏翰による著作『医学原始』は、『空際格致』、『性学物述』、『性学書』、『主制群徴』などの書籍を引用して、西洋医学の四体液説・肝血心説・供養説などを紹介したが、その影響は大きくない」[35]と評価された。この評価は中国で定論となっている。

②『物理小識』

『物理小識』は医学の専門書ではなく、一種の百科辞書である。そこでは方以智の西洋医学を含む洋学に対する見解が認められる。

『物理小識』において、方以智は、洋学に対して「詳于質測（質測に詳しい）」と高く評価していたが、「拙于言通幾。（通幾に足りない）」、「然智士推之。彼之質測。猶未備也。（しかしながら、これを推論すると、彼の実測はまだ完全でない）」

と不備な点があることも指摘した。[36] ここの「通幾」とは、奥深くて微妙な概念を究明することで、[37]「質測」とは、すべての事物の存在・変化の原因を実際的に観察・測量することである。[38]

この認識をもって、方以智は『物理小識』に耶蘇会士の『主制群徴』から西洋医学を受容した。彼は、西洋医学の生理学的・解剖学的知識を自分の著作に取り入れた最初の中国人であったのである。[39]

方以智の著作は、当時の情況下において、『通雅』と『物理小識』だけが認められ、広く読まれた。[40] それは中国に早期洋学の伝播の重要な源となった。

『物理小識』に引用し、紹介された西洋医学の知識が後世に影響を与えた事実が後世の学者の書物に残っている。清朝の趙彦暉（一八三二～一八九五）は『存存斎医話藁』（巻上第二十条）に脳神経・脊髄神経に関する内容を次のように抄録した。

「脳散動覚之気。厥用在筋。第脳距身遠。不及引筋以達百肢。復得頸節膂髄。連脳為一。因徧及也。脳之皮分内外層。内柔而外堅。既以保存本気。又以肇始諸筋。筋自脳出者六偶。独一偶逾頸至脳下。垂胃口之前。余悉存頂内。導気于五官。或令之動。或令之覚。又従膂髄出筋三十偶。各有細脈旁分。無膚不及。其與膚接処。稍変似膚。以膚為始。縁以引気入膚。充満周身。無不達矣。筋之体。瓤其裏。皮其表。類于脳。以為脳与周身連接之要約。即心与肝所発之脈絡。亦有其体。以伝本体之性于周身。蓋心肝与脳三者。体有定限。必藉筋脈之勢。乃能与身相維相貫。以尽其責。否則七尺之軀。彼三者何由営之衛之。使生養動覚各効霊哉？（前掲訳文があるので、ここで略す）」

その後に、「無可注曰。此論以肝心脳筋立言。是霊素所未発。以上二則。従鈔本医書中録出。未詳作者姓氏。（無可は「この学説は肝心脳筋によって立論したもので、『素問』、『霊枢』には載っていない」と注釈した。以上二箇所は鈔本医書から抄録したものである。著者の氏名は不明である）」[41] と記している。

実は、左記の全文はすべて『物理小識』に『主制群徴』からの引用文の抄録である。[42] 若干の文字の違いは認められる

が、後世の人の誤写によるものであろう。『物理小識』において「愚者曰。此論以肝心脳筋立論。是霊素所未発。故存以備引触（著者曰く：この学説が肝心脳筋から論述したものが、従来の中国医学『素問』、『霊枢』に記載されていないので、抄録して参考とする）」[43]という記述から、趙彦暉が「無可」と記した著者が方以智であることは断定できる。

この「是霊素所未発。故存以備引触」という認識は方以智が洋学に触れ、西洋医学と中国医学の異なる点に気付いた際に、西洋医学を拒絶することなく、選択的に受容したことを示している。このように、中国医学と西洋医学の両者を包含する態度は中国における初期の中西医学匯通思想の芽生えといえるだろう。このような模索は方以智の『通雅』にも見られる。

当時の条件下では、学者の方以智が医学界に与えた影響はあまり大きくなかったものの、中国医学史上では、方以智の中西医学匯通に関する発想の提出が早かったことは高く評価されてしかるべきである。

百科辞書である『物理小識』の西洋医学的な内容は一部抄録され、更に後世の医学専門書に引用されていることは明らかにしたが、『物理小識』を深く研究し、日本医学へ与えた影響について研究した先行論文はほとんどみられない。

『医学原始』と『物理小識』から、王宏翰と方以智が、直接、西洋医学の影響を受けた事実は明らかであるが、彼らが耶蘇会士との付き合いによって、触れた西洋の学問がほとんどヒポクラテスの液体病理学説とガレノスの解剖生理学説などの中世医学知識であり、当時においても、西洋医学的な観点においても、診療技術の点でも、中国医学より優れた点が見いだせなかったに違いない。そのために中国医学に根本的な影響を与えることはなかった。[44]さらに、後世においては、そこに書かれた西洋医学の内容と、その価値を再認識した時代の西洋医学との間には、大きな変化が生じていたことがあげられる。

五―2　『重訂解体新書』へ『医学原始』と『物理小識』の影響

大槻玄沢が『解体新書』を重訂した経緯について「重取二原書一。反復玩味。審ニ稽ヘ二正文ヲ一。細ニ捜リ二註証ヲ一。考二

索シ群書ヲ一。旁ニ羅シ百氏ヲ。又屢ク解体シテ。以徴ニ諸実景一。（再び、原著を読んで、何回も味わう。正文を対照し、注釈の証拠を探し、様々な書籍を調べ、各氏の見解を並べる。また、よく死体解剖を行って、書籍と実際を検証した）[45]と述べている。また、「又如キ二方密之物理小識。王恵源医学原始ノ一略ク拠テ二西説ニ一而論説スル者。苟有レハ下一節ノ之長。羽ニ翼スル本説ヲ一者上。抄シテ以収ム二諸ヲ名義解中ニ一。冠シテ曰フ二方氏王氏ノ一者是レ也。又有丁採テ散下見スル明季以降群書中ニ一者上。以為乙引証ト甲者丙。（方密之の『物理小識』と王恵源の『医学原始』は西洋学説によって論述したものである。優れて『解体新書』の重訂に役立つ箇所を抄録して諸名義解に入れる。前に方氏、王氏を名付ける。また、引用の証拠として明末以降の書籍からの抄録もある）[46]」と述べている。

大槻玄沢が主に方以智の『物理小識』と王宏翰の『医学原始』から数多く引用したことは既に明らかになったが、それらの引用のしかたから『医学原始』と『物理小識』の、『重訂』の完成と日本医学へ与えた影響を知ることが出来る。

大槻玄沢は『医学原始』と『物理小識』に対する評価を「漢自レ有ニ医道一以降。三千年。医人之多キ。医書之夥キ。無下一モ不ル涉ニ陰陽五行一者上。而シテ其説頗ル係ニ実測ニ一者。僅ニ此書ト（『医学原始』）与トノミ二明方氏所レ著（『物理小識』）耳。（中国医学三千年の歴史に、医者も大勢おり、医書も多く、それらで陰陽五行に触れないものはまったくないが、実測に基づいて完成したものは『医学原始』と『物理小識』しかない）[47]」と記している。また、この二書が「是二百年ノ前。先テ我ニ所レ発スル而其得レ実者。不レ為レ不ト多カラ矣。（これらは二百年前のものであるが、我々が発見するより先に事実を得たものは少なくない）[48]」と評価し、さらには知覚外官総論については「蓋本ヒテ二西説ニ一。而シテ合三旧記ト与ヲ二自見一而シテ為スレ説ヲ也。（西洋学説に基づいている、中国の旧説と自分自身の見解を合して作り上げた学説である）[49]」と評し、視官論については「其説未タ為スレ二全ク尽セリト。然ルモ原ト出ル二于西説ニ一。学者参ニ勘シテ之ヲ可ナリ也。（その学説は決して完璧とは言えないが、源は西洋医学であるので、学者にとって参考になるはずである）[50]」、「聞官論」に対し「今抄下出シテ其符スルレ実ニ者数条上。辨ニ正其訛謬一。以テ資レ考ヲ。（今回、事実に基づく内容を数カ所抄出して、その正誤を鑑別して、

参考とする）[51]」と評して引用にあたっての態度を明らかにしている。

大槻玄沢が『医学原始』と『物理小識』から抄録した西洋医学の知識はすべて王宏翰・方以智が耶蘇会士の著書から引用したものである。その原著者はすべて中国に長期間滞在し、漢文にも詳しく、中国の文化と風習にある程度の理解を持っている西洋人の耶蘇会士であった。従って、これら著作は漢文で書かれた漢籍、或いは漢文に翻訳して中国知識人の校訂を経た漢訳西洋典籍である。小川鼎三氏も「シナでは明の時代から宣教師によって西洋の学問が伝えられて、その優秀性が認められはじめた。その気運がいくらかでも日本に伝播していた」と耶蘇会士の著書の中国及び日本へ与えた影響を指摘している[52]。

西洋の学問が日本に導入される初期段階にあっては、オランダ語の原著を直接読める人は少なかった。漢文に馴染んでいる日本の知識人に対しては漢文による解釈と説明は一番理解しやすい近道であったため、漢籍が当時、洋学の輸入にも重要な役割を果たした。そこで、大槻玄沢は『重訂』に漢籍を大量に引用して、西洋医学を説明した。とくに、『解体新書』と『重訂』を比較してみると、本文の翻訳において、杉田玄白はしばしば『物理小識』を参考に使っているが、それ以上に、大槻玄沢は『重訂』の附録編に『医学原始』と『物理小識』を多く参考に使用している。大槻がオランダ語を完全に理解していたとみられない箇所があることからみても、西洋医学についての記述がある漢籍は、『解体新書』を重訂するために大いに助けになったことが推定できる。

ところで、『医学原始』と『物理小識』が日本で重要視されたことの証拠の一つとして、江戸時代に中国から輸入された両漢籍が内閣文庫に収蔵されていることが挙げられる[53]、[54]。杉本つとむ氏が「日本人が新しいヨーロッパ医学や自然科学を摂取するにあたり重要な媒体の役割を演じたのが『物理小識』である[55]」と述べているように、当時の蘭学者の間では、とくに『物理小識』がよく利用されている。

六、結　論

『医学原始』と『物理小識』は明末清初の中国における、西洋医学の受容を示す早期の著作である。王宏翰と方以智はその時代にあらわれはじめた中西医学匯通思想の代表的人物といえる。

大槻玄沢が『重訂解体新書』を翻訳するとき、西洋医学を理解するために、『医学原始』と『物理小識』から合理的な部分、事実に基づく西洋近代の解剖学的知識を重視して、多く引用した。引用した内容がヨーロッパでは中世の知識であるが、中国にとって未知のものであった。引用の方法には原文の採録、難解な部分の注釈、誤りの訂正の三種類が認められた。方以智の「是霊素所未発。故存以備引触」という認識は、中国における早期の中西医学匯通思想を反映したものである。

中国医学史では、あまり重視されなかった『医学原始』と『物理小識』を、日本では、大槻玄沢が原書の西洋医学の部分を受け入れ、西洋解剖学の導入と紹介のための参考として、高く評価した。

以上、本論文により、『医学原始』と『物理小識』が『重訂解体新書』の完成に深く影響を与えたことが明らかになったと考える。

謝　辞

本論文の作成について、ご指導をいただいた順天堂大学医史学研究室酒井シヅ客員教授、ご便宜を賜った北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部小曾戸洋部長に深謝申し上げます。

参考文献および注

（1）酒井シヅ「『解体新書』と『重訂解体新書』」洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』一三二頁、思文閣、京都、一九九一年

（2）杉田玄白新訳・大槻玄沢重訂『重訂解体新書』・附言・六丁表～裏、東都書肆、千鐘房発行、文政九年、以下この版本を使用した。また、引用に際しては、返り点・送りがな・中棒を原文より書写することとした。

（3）前掲文献（2）

（4）性理学　理学ともいう。人間の生来もつもの（性質・性）と宇宙の万物の根元・気質（原理・理）を重視した学問。中国の宋時代の学者周濂渓・程顥・程頤・朱熹らが唱えた。

（5）馬伯英ら著『中外医学文化交流史・中外医学跨文化伝通』四八六頁、文匯出版社、中国上海、一九九三年

（6）范行準『明季西洋伝入之医学・巻一』二十八丁、中華医史学会

（7）坂出祥伸「方以智の思想―質測と通幾をめぐって」―薮内清・吉田光邦編『明清時代の科学技術史』九十三頁、京都大学人文科学研究所刊、京都、一九七〇年

（8）丁珏「方以智―中西医学匯通思想的啓蒙者」『中華医史雑誌』二四巻二号、八十五頁、一九九四年

（9）張慰豊「早期西洋医学伝入史略（自漢唐至明清時代）」『中華医史雑誌』十一巻一号、一頁、一九八一年

（10）范行準『明季西洋伝入之医学・巻二』中華医史学会

（11）性学　動物と人類の感覚・知覚・霊性及び霊魂を論述している学問。

（12）陶恵寧「『重訂解体新書』所引の『医学原始』について」『日本医史学雑誌』四十六巻三号、三四二頁、二〇〇〇年

（13）陶恵寧「『重訂解体新書』所引の『物理小識』について」『日本医史学雑誌』四十七巻三号、五〇八頁、二〇〇一年

（14）前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・一丁表～一丁裏

（15）前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・十六丁裏

（16）前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・二十七丁表、細字双行

（17）前掲文献（2）『重訂解体新書』・旧刻解体新書凡例・一丁裏

（18）前掲文献（2）『重訂解体新書』・巻之六・巻一名義解下・七丁裏～八丁表

（19）前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・二十八丁表

(20) 前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・二十八丁表
(21) 前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・三十丁裏
(22) 前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・二十八丁裏
(23) 前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・十七丁裏
(24) 前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・十七丁表
(25) 小川鼎三「解体新書の神経学」『順天堂医学雑誌』十五巻一号、二十九頁、昭和四十四年（一九六九年）
(26) 前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・十七丁表
(27) 前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・十七丁表
(28) 前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・二十一丁表
(29) 前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・十七丁表
(30) 前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・二十一丁表
(31) 前掲文献（4）四七九頁
(32) 前掲文献（5）『明季西洋伝入之医学・巻一』二十八丁
(33) 中国中医研究院図書館編『全国中医図書聯合目録』、中医古籍出版社、中国北京、一九九一年
(34) 王宏翰『医学原始』（明清中医珍善孤本精選・清代康熙三十一年原刊影印本）、上海科学技術出版社、中国上海、一九八九年
(35) 盧嘉錫総主編　廖育群ら著『中国科学技術史・医学巻』四七九頁、科学出版社、中国北京、一九九八年。訳出は筆者による。
(36) 王雲五主編・方以智著『国学基本叢書四百種・物理小識』・自序・一頁、台湾商務印書館、中華民国五十七年
(37) 方以智の原文は「重玄一実、是物物神神之深幾也。寂感之蘊。深究其所自来。是曰通幾。」であるが、これについて、坂出祥伸氏は「重玄なる世界に蔵されている「一実」を求める方法である。「一実」は、別の立場からすれば、人間が万物にとらわれることなく、神秘なるものにすらとらわれることのない境地であろうか。そしてまた、その境地は、有形のものとして見ることはできず、ただ深くかすかな幾としてしかあらわれない。寂感（体用）で成り立つ世界のより奥深い所に、深幾の「よりて来たる所を究める」のが通幾」（前掲文献　一〇〇頁）であると解釈している。
(38) 方以智の原文は「物有其故、実考究之。大而元会、小而草木蠢蠕。類其性情、徴其好悪、推其常変、是曰質測。」であるが、

これについて、坂出祥伸氏は「すべての物は、かならずその存在・変化の「故」があるから、これを実際的に考究する、すなわち、性情の類別、好悪の明徴、常変の推察など、要するに事物についての観察・測量を行わねばならない。これが質測だ。」（前掲文献　九八頁）であると解釈している。著者は通幾と質測が方以智の造語であり、彼が提唱した物理を認識する方法であると考える。

(39) 前掲文献（34）一頁
(40) 趙璞珊　「方以智的医薬論述和見解」『中華医史雑誌』二十三巻二号、六七頁、一九九三年
(41) 前掲文献（5）『明季西洋伝入之医学・巻一』二十七丁
(42) 前掲文献（29）四七八頁
(43) 王雲五主編・方以智著『国学基本叢書四百種・物理小識（巻之三・人身類）』七四頁、台湾商務印書館、中華民国五十七年
(44) 李経緯主編『中外医学交流史』二六一頁、湖南教育出版社、中国長沙、一九九八年
(45) 前掲文献（2）『重訂解体新書』・附言・二丁裏
(46) 前掲文献（2）『重訂解体新書』・附言・五丁裏
(47) 前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・三十二丁裏
(48) 前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録下・巻之十二・八丁表
(49) 前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・十三丁裏
(50) 前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・二十二丁裏
(51) 前掲文献（2）『重訂解体新書』・附録上・巻十一・二十六丁裏
(52) 小川鼎三「日本の医学史から（四　解体新書のことなど）」『日本医事新報「ジュニア版」』二十号、十一頁、昭和三十八年八月十五日
(53) 王宏翰　『医学原始』（江戸時代写本・九巻・内閣文庫）、東京
(54) 方以智撰・于藻校『浮山此蔵軒　物理小識』（寛政七年写本・十二巻　総論一巻・内閣文庫）、東京
(55) 杉本つとむ「近代、日・中言語交渉史序説（方以智『物理小識』を中心に）」『国文学解釈と鑑賞』五十六巻一号、一八六頁、一九九九年

（順天堂大学医学部医史学研究室）

A Study of the Chinese Books Quoted in "Chotei Kaitai-shinsho"

"Yi Xue Yuan Shi" and "Wu Li Xiao Shi"

Tao HUINING

Gentaku Otsuki quoted from "Yi Xue Yuan Shi" and "Wu Li Xiao Shi" when revising "Kaitai-shinsho".

He quoted from them in three ways; quoting the original text, quoting them to annotate the difficult terms, and quoting them to correct errors in the original text.

When Western medicine was first introduced to Japan, the interpretation and the explanation of Chinese classics was utilized to translate Dutch medical books.

The study has clarified for the first time that "Yi Xue Yuan Shi" and "Wu Li Xiao Shi" contributed greatly to the accomplishment of "Chotei Kaitai-shinsho" and to the importation of Western medicine into Japan.